

『構造的暴力による社会的虐待』

—福島原発事故がもたらした精神的被害に 関する実証的研究—

辻内 琢也 (医師・医学博士)

- ・早稲田大学人間科学学術院 教授
- ・早稲田大学災害復興医療人類学研究所
所長
- ・震災支援ネットワーク埼玉(SSN)運営委員



Photo ©T.TSUJIUCHI



原子力発電所の爆発／住民の避難



2011年3月12日 1号機爆発



2011年3月14日 3号機爆発

大規模アンケート調査

医療人類学および人間科学的観点からの
量的および質的調査

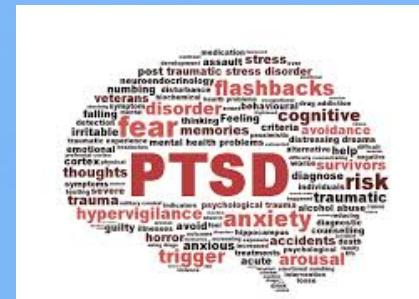
共同実施：震災支援ネットワーク埼玉
NHK仙台・福島放送局





心的外傷後ストレス障害（PTSD）

- 心的外傷後ストレス障害（Post-Traumatic Stress Disorder：PTSD）は、災害や大事故、戦争や紛争、犯罪など、生命の危険性が高い出来事に伴うストレス障害であり、「自分または他人の生命の危険を感じる精神的外傷体験による強い恐怖と無力感」として定義される。
- 症状としては、フラッシュバックなどの「侵入症状」、ショックを受けた出来事を避けようとする「回避症状」、睡眠障害や神経の高ぶりなどの「覚醒亢進症状」がある。



改訂出来事インパクト尺度（IES-R）

下記の項目は、いずれも、強いストレスを伴うような出来事に巻き込まれた方々に、後になつて生じる事があるものです。「東日本大震災」に関して、最近の1週間では、それぞれの項目の内容について、どの程度強く悩まされましたか。

		まったくなし	少し	中くらい	かなり	非常に
1	どんなきっかけでも、そのことを思い出すと、その時の気持ちがぶり返してくる	0	1	2	3	4
2	睡眠の途中で目が覚めてしまう	0	1	2	3	4
3	別のことをしていても、そのことが頭から離れない	0	1	2	3	4
4	イライラして、怒りっぽくなっている	0	1	2	3	4
5	そのことについて考えたり思い出すときは、なんとか気持ちを落ち着かせるようにしている	0	1	2	3	4
6	考えるつもりはないのに、そのことを考えてしまうことがある	0	1	2	3	4
7	そのことは、実際には起きなかつたとか、現実の事ではなかつたような気がする	0	1	2	3	4
8	そのことを思い出させるものには近寄らない	0	1	2	3	4
9	そのときの場面が、いきなり頭に浮かんでくる	0	1	2	3	4
10	神経が敏感になっていて、ちょっとしたことで、どきつしてしまう	0	1	2	3	4
11	そのことは考えないようにしている	0	1	2	3	4

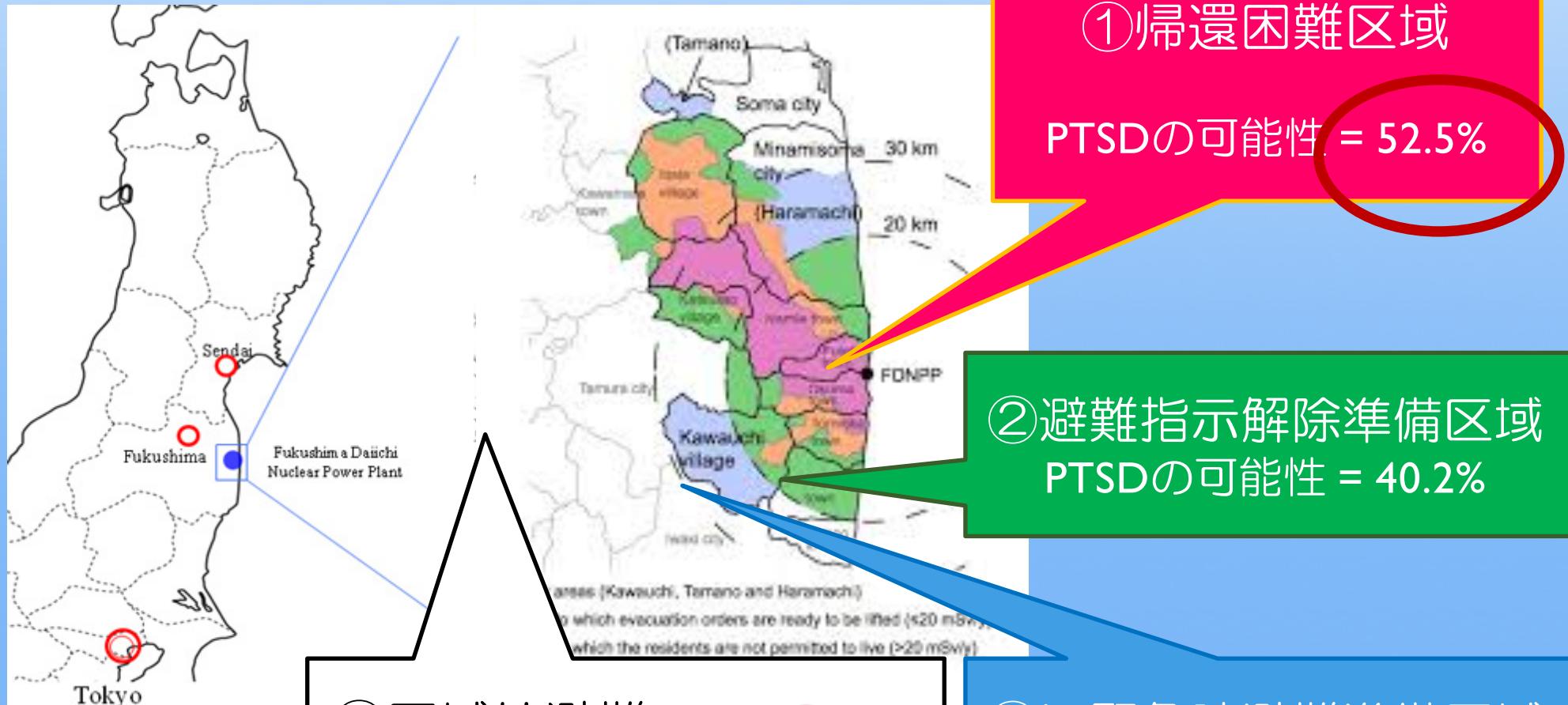
12	そのことについては、まだいろいろな気持ちがあるが、それには触れないようにしている	0	1	2	3	4
13	そのことについての感情は、麻痺したようである	0	1	2	3	4
14	気がつくと、まるでその時に戻ってしまったかのように、ふるまつたり感じたりすることがある	0	1	2	3	4
15	寝つきが悪い	0	1	2	3	4
16	そのことについて、感情が強くこみあげてくることがある	0	1	2	3	4
17	そのことをなんとか忘れようとしている	0	1	2	3	4
18	物事に集中できない	0	1	2	3	4
19	そのことを思い出すと、身体が反応して、汗ばんだり、息苦しくなったり、むかむかしたり、どきどきすることがある	0	1	2	3	4
20	そのことについての夢を見る	0	1	2	3	4
21	警戒して用心深くなっている気がする	0	1	2	3	4
22	そのことについては話さないようにしている	0	1	2	3	4

表1. ストレス度の4年間の推移
(Tsujuchi, 2015)

調査期間	2012年 3月	2013年 2月	2013年 3月	2014年 3月	2015年 2-3月
対象者避難先	埼玉県	福島県	埼玉県 東京都	埼玉県 東京都	日本全国
共同実施者	SSN	NHK	SSN	SSN	NHK
対象(世帯数)	2,011	2,425	4,268	3,599	16,686
回収数	490	745	530	761	2,862 (448)
回収率	24.4%	30.7%	12.4%	23.9%	17.2%
IES-R 平均値	36.31	34.20	31.93	31.07	25.86
PTSDの 可能性がある 者の割合	67.3%	64.6%	59.6%	57.7%	52.5%



図1.避難区域別のPTSDの可能性 (2015)



①帰還困難区域

PTSDの可能性 = 52.5%

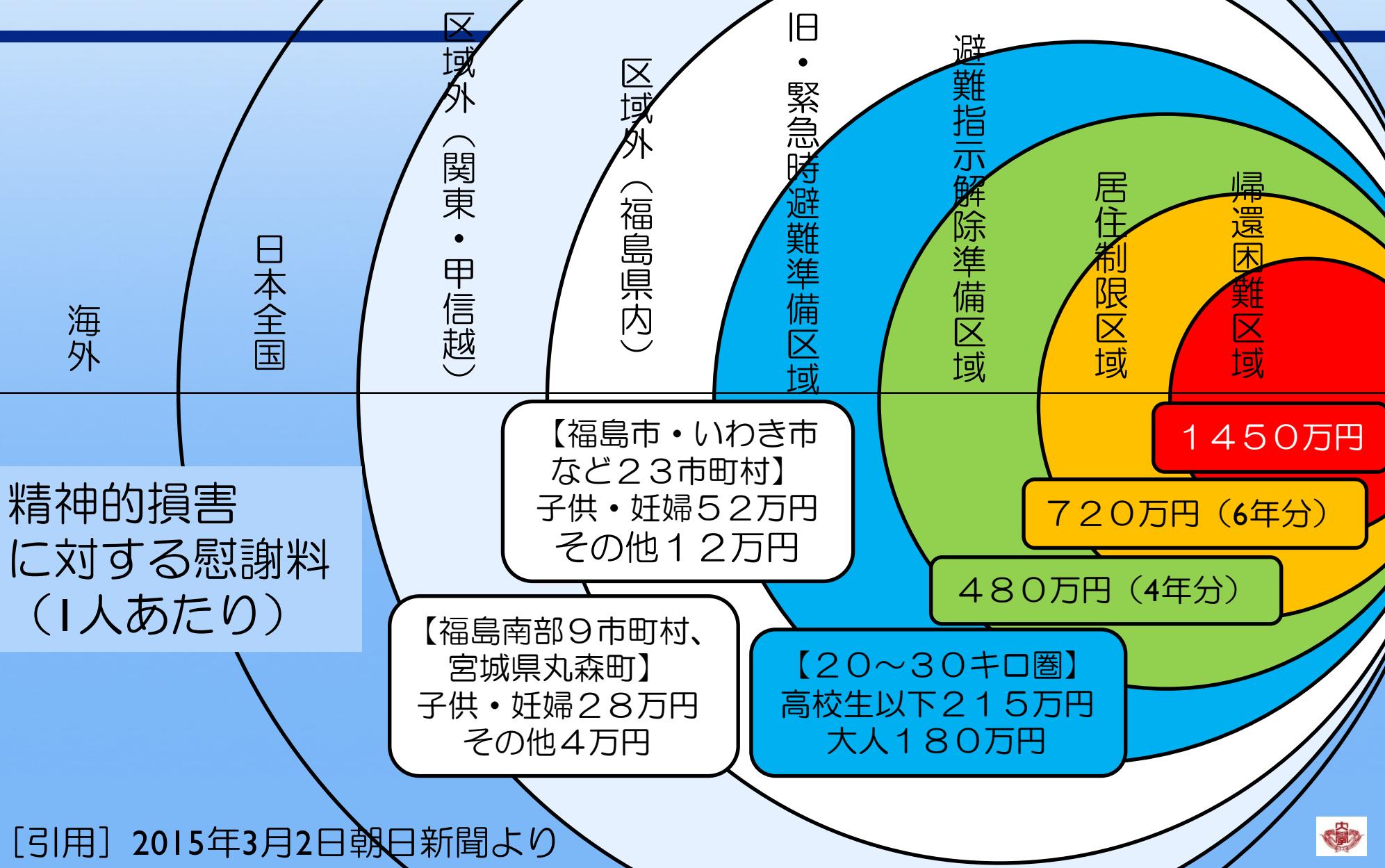
②避難指示解除準備区域

PTSDの可能性 = 40.2%

④区域外避難（自主避難）
PTSDの可能性 = 43.3%

③旧緊急時避難準備区域
PTSDの可能性 = 31.0%

避難区域による賠償金の格差





道路を隔てて「地域の分断」

防犯カメラ作動中



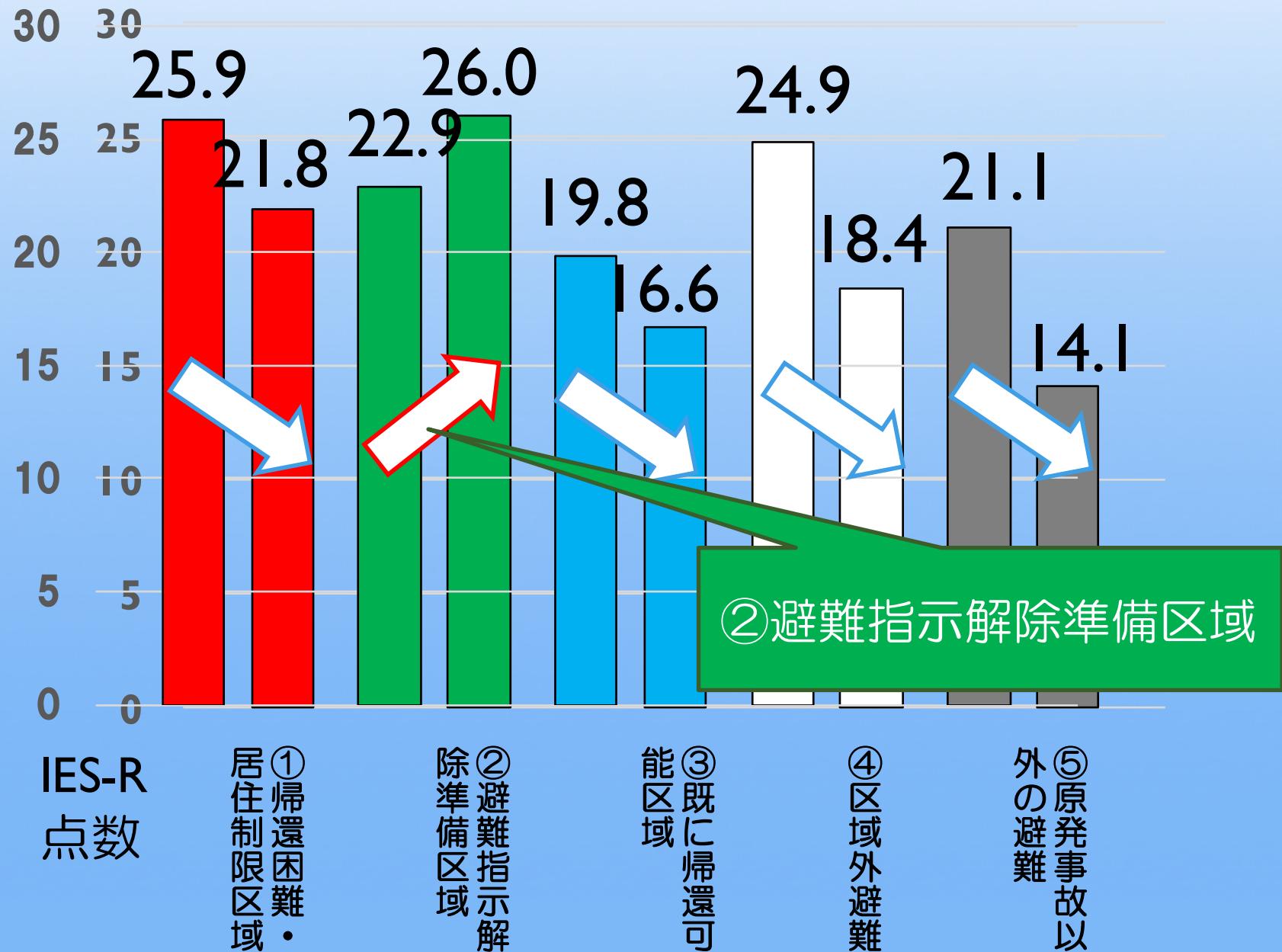
この先
帰還困難区域 につき
通行止め



Photo ©T.TSUJIUCHI

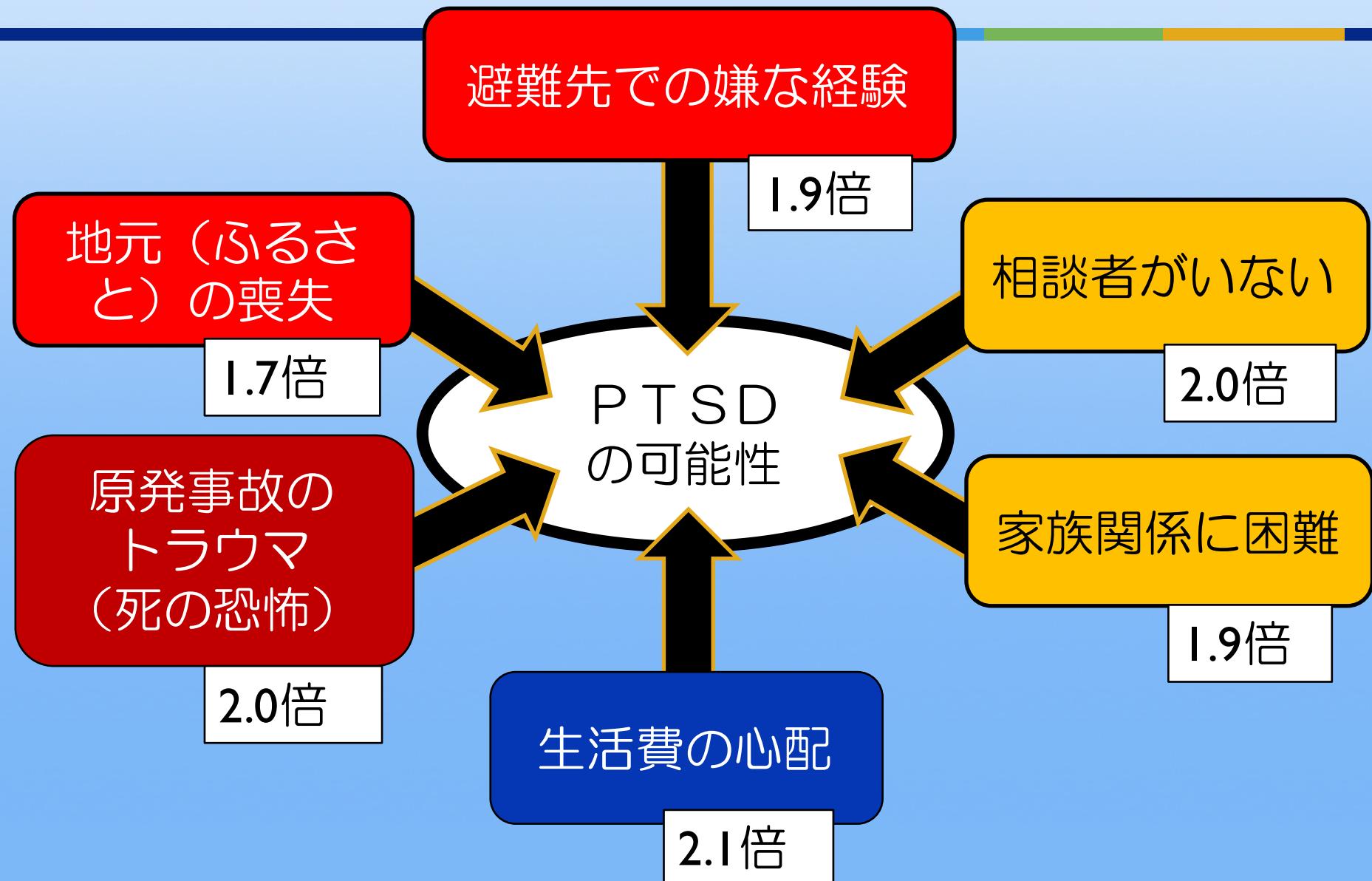


ストレス度の変化 (2015→2016)

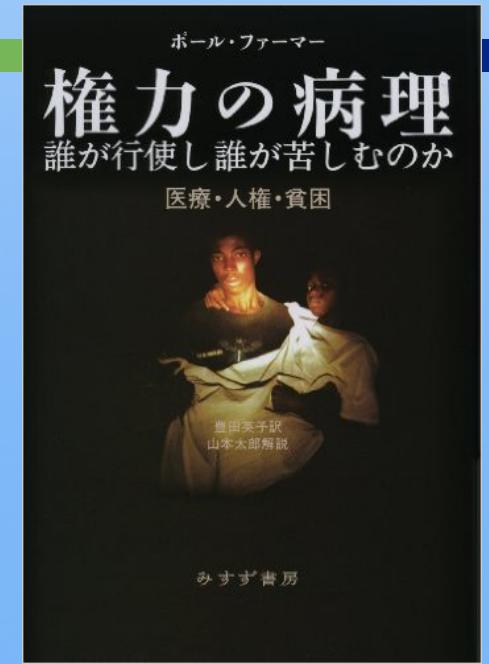
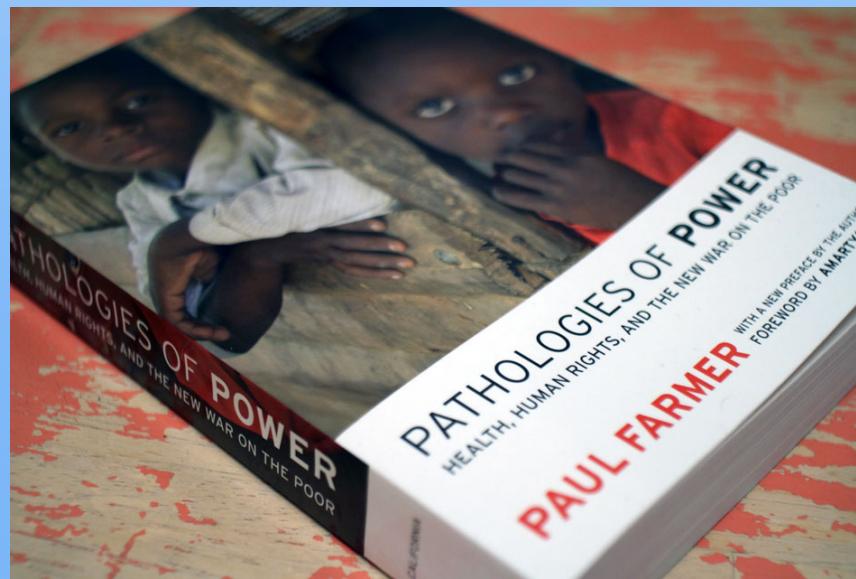


PTSDに影響を与える要因

–2015年度NHK調査データから–



構造的暴力 (Structural Violence)



Paul Farmer: Pathologies of Power, 2005



構造的暴力 (Structural Violence)

- 平和学の分野で、ヨハン・ガルトゥング (Johan Galtung, 1969) によって提唱された概念。
- 構造的暴力は、政治・経済・社会・文化などの構造に組み込まれており、社会的不正義や、生活の機会の不平等・格差・差別として現れている。
- 医療人類学者ポール・ファーマー (Paul Farmer, 2012) が、ハイチの貧困と健康の不平等に認められる構造的暴力と、そこから必然的に生まれる虐待について詳細に分析している。



構造的暴力の下部構造



- ①原子力発電という開発を推進してきた戦後の経済政策
- ②大企業優先の経済政策による富の不平等分配
- ③“中央”対“地方”という地政学的な搾取の構造
- ④自由主義という名の競争原理に基づく、社会格差を生み出す構造
- ⑤自己責任論を基礎とした医療や福祉における社会責任の放棄
- ⑥核の平和利用を抑止力として使った戦後の国家安全保障

事例Ⅰ(強制避難)

- 福島県双葉郡双葉町から避難し、埼玉県草加市にて避難生活を送っている67歳の女性は、90歳の父親と85歳の母親を抱え、狭いアパートで老老介護生活を強いられている。
- 父は一日中コタツに座ったきりで、母は朝早くアパートの前を掃き掃除するだけで、その後はコタツに入って一日中寝ている状況だと言う。



- 『誰もくるわけでもなく、どこ行くでもなく、3度のごはんを食べては寝てます。何もする事がないです』
- 『自殺する人の気持ちはよく分かります。でも死ぬのは簡単な事です。死んで楽になる人は良いでしょうけど、あとに残された人は死ぬにも死ねないで先の見えない現状に苦しむだけです。生きて支え合って一緒に苦労を分かち合えればと思うのですが。でも現実はやっぱり死ぬほど苦しい』



- 『町へは帰れません。90と85の父母がこのまま町へも帰れず、定住の地のあてもなく、いつかは死んで行くその時まで何の希望もなく終わらせてしまうのかと思うと、とても残念です。私達が今もっているお金では他の土地に住宅は持てないと思います』
- 『私の夫も原発で働いてお金を頂いてきましたから、あまり東電の事をあれやこれや悪くは言えないところもあります。いわきに住所を求めた人たちには立派な家を建てて地元の人達に良く思われていないようになりますが、その人たちは元々良い暮らしをしていてお金もいっぱい持っていた人たちだから早くにいわきに落ち着けたのだと思います。私達みたいにそれなりの並の人達にはまねができません。それで先が見えないので。』



事例 2 (自主避難)

- 福島県郡山市から避難し、青森県青森市にて避難生活を送っている36歳の男性は、いわゆる「自主避難者」であり、親族が離婚後自殺に至った苦しみを次のように記述している。



- 『気分が落ち込む日やイライラする日が多くて辛い』
- 『自殺してしまう人々の気持ちはよくわかります。私も一步間違えれば死んでいたかもしれません。1年数か月前にいとこが自殺しました。やはり原発事故で避難しており、その後離婚し、自殺に至りました。いとこの遺影が自分の姿に見えて仕方ありませんでした。東電を今でも恨んでいます。東電は人殺しです。』



- 放射能汚染により安心して子育てができないようになった状況が生まれているにも関わらず、政府や福島県による安全・安心を強調するプロパガンダに対して、次に用に記している。
- 『安全ばかりうたっているが、安心して子育てできる環境じゃないと意味がない。安心できる地元に帰りたいです。』



■ 『事故以前の環境にはどうやっても戻らないでしょう。だからせめて責任逃れせずに、賠償はしっかりしてほしいと思います。日本国憲法は、国や企業より個人を尊重しているはずです。それなのに、個人より国や東電を守る日本という国はなきれない国だと思います。そんな日本の将来が心配です。』



事例 3 (母子避難)

- 福島県双葉郡双葉町から避難し、福島県いわき市にて避難生活を送っている37歳の女性は、震災前に離婚したばかりであり、二人の子どもと共に「母子避難」の状況である。
- 精神的に追い詰められており、起死念慮まである極めて深刻な状態である。何度か、地元の双葉に帰って自殺をしようと思ったこともあると言う。



- ▣ 『すぐ死にたい。殺して欲しい。今後生きていって仕方ないから、臓器提供でも何でも良い。消えたい。』
- ▣ 『自殺したくなる気持ちは分かる。自分も何度か双葉に帰ってやろうと思ったが...。子供の顔が浮かぶ。私には出来なかった。来年子供（長女）も高校生。もういいでしょ？』



- 『震災前1月に離婚し、養育費のかわりとして、主人名義の家に住んでいた。ローンがあったので、それを養育費として支払、完済後、息子名義にする書類をかわしているのに、賠償は別れた夫に入り、その後逃げるかのように連絡はない。』
- 東電に言っても、弁護士に言ってもひとごとだし、そう言う場合もあるとの事で...対策を考えて欲しい』



- 『避難者と言う言葉は嫌いだ。いやがらせを受けやすい。こっち（いわき市）来て、ローソンでバイト（夜間）をした。子供の面倒を専門しないといけないので、夜間やっていた。
- 被災者は賠償金をもらえる。そんな感じで、おごれ！金かせ！そんなバカばっかりで、嫌がらせがありやめた。仕事するのもこわくて働けない』



結論 |

- 原発事故被害者が追い込まれている状況を分析すると、「構造的暴力による社会的虐待」と考えられる状況が読み取れる。
- 社会的虐待とは、社会から棄てられ、無視（ネグレクト）され、孤立させられ、社会的な参加や活動を阻害される状況を意味する
- 原発事故という暴力によって「生活・人生・環境」に関わるすべてが根こそぎ奪われただけではなく、その後の「帰還」と「賠償」をめぐる政策決定が、継続する構造的暴力となって被災者・被害者の「生活・人生」を蹂躪していると言える。



結論 2

- また避難先地域での「嫌な経験」から避難者であることを隠して生活する人も多く、被害者の置かれている状況は、社会から棄てられ、無視（ネグレクト）され、孤立させられ、社会的な参加や活動を阻害されている、まさに**「社会的虐待」**を受けている状況だと言える。
- このような心理的・社会的・経済的に追い込まれた状況を放置することは社会的正義に反することであり、法的支援が強く求められるものである。



文献

- ▣ Tsujiuchi T, Yamaguchi M, Masuda K, Tsuchida M, Inomata T, Kumano H, Kikuchi Y, Augusterfer EF, Mollica RF:
High prevalence of post-traumatic stress symptoms in relation to social factors in affected population one year after the Fukushima nuclear disaster.
PLoS ONE 11(3):e0151807. doi:10.1371/journal.pone.0151807, 2016
- ▣ 辻内琢也, 小牧久見子, 岩垣穂大, 増田和高, 山口摩弥, 福田千加子, 石川則子, 持田隆平, 小島隆矢, 根ヶ山光一, 扇原淳, 熊野宏昭 : 福島県内仮設住宅居住者にみられる高い心的外傷後ストレス症状－原子力発電所事故がもたらした身体・心理・社会的影響－. 心身医学56(7) : pp723-736, 2016
- ▣ 山口摩弥, 辻内琢也, 増田和高, 岩垣穂大, 石川則子, 福田千加子, 平田修三, 猪股正, 根ヶ山光一, 小島隆矢, 扇原淳, 熊野宏昭 : 東日本大震災に伴う原発事故による県外避難者のストレス反応に及ぼす社会的要因～縦断的アンケート調査から～. 心身医学56(8) : pp819-832, 2016
- ▣ 辻内琢也 : **原発事故がもたらした精神的被害：構造的暴力による社会的虐待**. 岩波書店, 「科学」86(3) (2016年3月号) : pp246-251, 2016.03

ご静聴ありがとうございました。

